

フアード・アル・タカリリー (Fu'ād al-Takrīr, 一九二七—二〇〇八年) は二十世紀のイラクを代表する作家のひとり。短編小説、長編小説、戯曲の各ジャンルで作品を残した。比較的寡作ではあるものの、二十世紀後半のイラク小説、ひいてはアラブ小説の発展に重要な貢献をなした作家として高く評価されている。一九九九年には「スルターン・ビン・アリー・アル・ウワイス賞（一九九八—一九九九年の小説・演劇部門）」——アラブ首長国連邦の民間文化基金が二年ごとに発表する大規模な賞——を受賞した。

アル・タカリリーは一九二七年、バグダードのバード・アル・シャイフ地区に中流家庭の子として生まれた。のちに大詩人となるアブドゥルワッハブ・アル・バヤーティー (Abd al-Wahhāb al-Bayātī, 一九二六—一九九九年) とは小学校時代からの友人だった。一九四九年に法学部（現バグダード大学法学部）を卒業したあとは一九八三年まで三十五年間にわたって法曹界

で活躍し、イラク国内のさまざまな場所で裁判官などを歴任した。本短編「パン焼き窯 (al-panīn)」(一九七三年) にも、こうした職業上の経験が創作に及ぼした影響を見ることができ

る。小説作品をレバノンやイラクの雑誌などに発表し始めたのは一九五〇年代初頭からで、最初はもっぱら短編作家として知られた。しばしば、アブドゥルマリク・ヌーリー (Abd al-Malik Nu'ayrī, 一九二二—一九九二年) らとともに、イラクの短編小説に飛躍的発展をもたらした作家として名が挙がる。一九六〇年には初の短編集『別の顔 (al-wajh al-ākhar)』を刊行しているが、これにも詩人アル・バヤーティーが関わっていたという。この短編集は一九八二年に八作品を加えた増補新版が刊行されており、そのなかに「パン焼き窯」も含まれている。一方、長編小説としては一九八〇年に刊行された『遠くのだま (al-ra'aj al-ba'īd)』が有名である。これは、共和制下のバグダードに暮らす一家三代をさまざまな視点から語った物語で、アル・タカリリーのみならず、イラク小説全体を代表する作品の一つとなった。

* * *

「パン焼き窯」は独白体で書かれた作品であ

る。副題にあるとおり、語り手による空想上の自己弁論という体裁をとっている。不貞を働いた義妹ファルハを殺すことで一家の名誉を守るうとした、すなわち「名誉殺人」を行ったと彼は主張する。しかしやがて語るに落ちて、さまざまな自己矛盾をきたし、徐々に読者の前に「真実」を露呈してゆく。どうやら彼は、妻子ある既婚者であるにもかかわらず、同じ屋敷内に住む異兄妹ハリーマと不倫関係にあるらしい。ファルハは二人が同衾しているところを目撃してしまったがゆえに、ハリーマに拳銃で撃ち殺されてしまったようである。そこで、語り手は「名誉殺人」を捏造し、自ら犯人と名乗り出ることでの窮地を切り抜けようとする。たしかに、異兄妹ハリーマを守ろうとする気持ちもあるのだろう。だが、結局は自らの醜聞を恐れているだけ、おのれの「名誉」を守ろうとしているだけのようにも映る。

いわゆる「名誉殺人」(jarīmat sarāf) はアラブ圏にかぎられたものではない。ただ、この種の犯罪が、現在にいたるまでアラブ諸国でしばしば深刻な社会問題になってきたことは事実である。ふりかえって見れば、文学の世界でも、名誉殺人あるいは「女性の貞操と家族（男性）の名誉」をめぐる行われる犯罪を取り上げた作家は多い。アラブ圏全体だとおそらく相当数の作品が書かれているのではないか。少し言及

する程度の作品も含めれば、それこそ山のようにあるだろう。筆者の主たる関心からエジプトの例になってしまいが、ターハー・フサイン (Tahā Husayn, 一八八九—一九七三年)、マハムード・ターヒル・ラーシーン (Mahmūd Tahir Ḥasīn, 一八九四—一九五四年)、ヤハヤー・ハツキー (Yahyā Haqqī, 一九〇五—一九二二年)、ナギーブ・マハフーズ (Najīb Mahfūz, 一九一—二〇〇六年)、ユースフ・イブリース (Yusuf Idrīs, 一九二七—一九九一年)……というように、小説草創期以来の有名家の名が立て続けに浮かんでくる。

そのようななか「パン焼き窯」がユニークなのは、名譽殺人が実際には行われていないことだろう。無論、殺人は行われたが、犠牲者は「姦婦」ではない。逆に、姦通(婚外交渉)かつ近親相姦)を行った人物が目撃者を殺している。その殺人を(法律上はともかく社会的に)正当化するための論理として、「名譽殺人」が持ち出されている。そこに、かえってこの社会問題の根深さが示されているとも言える。語り手は、近代国家の裁判官に対し、一家の名譽を守るために姦婦を殺した自分は「無実」だと主張する。こうした情理に訴えることが有効であるが、少なくとも彼は考えている。それは、自分が暮らす社会が近代法のみによって支配されているわけではないことを知っているからである。

とはいえ、彼の言葉遣いを見れば、彼が完全に「伝統」の側に立つナイーブな人間でないことも明らかだろう。情状酌量を引き出すことによって彼は自負と卑下が入り混じったさまざなな形容を自らに与えている。たとえば、「生粋のアラブ」「学のないベドウィン」「注意力散漫な人種」「自ら身を立て、読み書きを学んだ」「高貴なる蛮族」(西洋起源の表現の引用?)などである。だが、このような表現自体に近代人の視線がすでに含まれているところが皮肉な効果を生んでいるように思われる。

【参考文献】

アルリタカリーの経歴等については、以下のアンソロジーや事典類を参照した。

- ・ Sabry Hafez & Catherine Cobham eds., *A Reader of Modern Arabic Short Stories*, London: Saqi Books, 1988. (本作品のアラビア語テキストも収録されているが、段落構成や一部の語句がこの翻訳で依拠した初出テキストと異なっている。)

- ・ Julie Scott Meisami and Paul Starkey, eds., *Encyclopedia of Arabic Literature*, 2 Vols., London and New York: Routledge, 1998.
- ・ Jamel Eddine Bencheikh, *Dictionnaire de littératures de langue arabe et maghrébine francophone*, (Quadrige), Paris: Presses

- universitaires de France, 2000.
- ・ Handī Sakkūt ed., *Qāmūs al-ʿAdab al-ʿArabi al-Ḥadīṭī*, 2nd ed., Cairo: al-Hayʾa al-Miṣriyya al-ʿĀmma li-l-Kitāb, 2015.